

複雑化する日本の安全保障



Vol.13
「冷戦」ということ

私にとっては役所に入ってから15年余りを「冷戦」という時代で暮らして来ました。そこで使われていた「冷戦」という言葉は、軍事力を使った「熱い」戦争ではなく、それ以外の手段を使つての「冷たい」戦争ということが語源となっています。米国とソ連とがそれぞれの盟主となつた東西両陣営の対立は、軍事的な衝突になりにかねない危険をはらみなが

生産というものが従来にない規模で広がっていくと、それを担う「労働者」と呼ばれる人達の階層が生まれました。貧しくなつていく農村から離れて都市部へ移動し、そこで工場の労働者として働くのです。環境は劣悪でした。『レ・ミゼラブル』や『マイ・フェア・レディ』に映し出される都市の貧しい人たち、それが新しく生まれてきた労働者階級です。その人たちが政治的な勢力となり自分たちの権利と利益を主張する、その流れの中で生まれてきたのが「共産主義」であり、実態はともかくとして形の上でそれを実現したのが第一次世界大戦末期にロシアで起こつた共産主義革命でした。敗戦国のドイツでも共産主義の革命の運動がありました。共産主義の革命の運動が英米などの国にとっては、共産主義は労働者階級の中に蔓延る疫病のようなものであり、ソ連が革命を輸出してくるのではないかとという恐怖感切実なものだったのです。

ここには明らかな世界観の違いが

ら40年あまり続くのです。最後は核兵器による殲滅という恐怖の下で続けられた睨み合いの中では、両陣営間の交流というものは極めて乏しいものでした。

対立の始まりは第二次大戦の時の欧州戦線でした。

ナチス・ドイツ打倒で協力した米国とソ連とは、東西からドイツを攻め立てて1945年4月にドイツ国内のエルベ川で出会う事となりました。当時既にドイツの首都ベルリンはソ連の重囲の下にありましたが、4月30日にヒットラーが自殺した後5月2日に至つてドイツ軍は降伏し漸く絶望的な抵抗は終わるのです。共通の敵の打倒、その目的が達成されるとソ連の西側に対する警戒感むき出しになっていきます。

こうした対立と相互不信は、1945年2月に行われたヤルタ会談から始まったと言われています。米国のルーズベルト大統領、イギリスのチャーチル首相、そしてソ連のスターリン書記長が会つて、戦後欧

ありました。東西の陣営とは、この世界観の違いによつて区別されるグループ、そして異なつた世界観に基づいた異なつた経済体制のグループ、極めて限られたものでしかなかったのです。

私が経験してきた「冷戦」とは、この二つの世界観の違う集団が対峙している状況でした。ですから、国際経済体制の中に組み込まれている今の中国を相手に米国が対決している状況を「新冷戦」と言うには、納得できないものがあります。むしろ、19世紀後半の英国とドイツとの覇権を巡る争いに近いのではないだろうか、そんな感じがしてならないのです。

もう一つ。
先日ウェブの会議でスウェーデンの軍人がこんなことを言っていました。

「我々は当時、ロシア人への敵愾心というものを明らかに持っていた。恐れ、憎んでいた。今の中国人相手に、そのような感情はないよ。だから米

州の勢力圏を議論した会議です。そこで露わになつたのは、大国間の相互不信でした。

英米にとつては共産党の政権というものは信じることのできる相手ではありませんでしたし、ソ連にしても英米はナチス・ドイツと組んで自分たちを抹殺しようとしているのではないかと疑うことは無理のない事でした。ドイツという共通の敵がい

たからこそ三カ国間の足並みを揃えることは何とかできたのですが、戦争終結が目前に迫つた1945年の春になつては勢力圏の確保をめぐる衝突は熾烈でした。とりわけポーランドにどのような政権を認めるのか、その領土をどのように決めるのか、ということについては妥協の余地はなく、ヤルタ会談で決まつた内容はその後次々に覆されていきます。

対立の一方の盟主となつたソ連の共産主義の政権というものは、何なのか？

簡単に説明するのは、ちよつと無理でしょう。産業革命が進んで工業中対立を「新」という一語をかぶせるにせよ「冷戦」と表現することに違和感がある」

対立という新しい方向に舵を切つたように見える米中の関係をどのように定義するかについては、まだまだ議論が足りないようです。



西 正典

Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー。